甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 11 (Nov. 1970)

日本産タマムシ科解説（9）

黒沢良彦

X. Subfamily **Agrilinae** ナガタマムシ亜科

触角の感覚孔は各鋸歯状節の内面の先端部にある陥凹部に集中する。触角窩は複眼の内側から距って位置し，顔面は触角窩によって狭められる。前胸背の後縁は明らかに波曲し，腹板窩はほとんど完全に後胸腹板ばかりからなる（第4図6）。中基節窩間の距離は前基節窩間の距離より広くない。

小型で細長の種類ばかり多く，全部の種類が被子植物のうちの双子葉植物に加害し，他の亜科のように裸子植物や単子葉植物に加害する種類はない。このことは本亜科は最近の地質年代になって急激に進化したことを物語っている。極めて種類数が多く，タマムシ科の約半数は本亜科に属する。全世界に産し，次の2族に分けられる。

1. ——跗節は短く，後跗節第1節は第2,3両節を合した長さより短いか，またはそれと等長 ……A. Coraebini
——跗節は細長，後跗節第1節は少なくとも次の3節を合した長さと等長か，またはそれ以上……B. Agrilini

A. Tribe **Coraebini** ナカボソタマムシ族

熱帯から温帯にかけて多くの属と種類があるが，その多くは旧世界に集中し，新世界には少ない。特に北アメリカ大陸には少なく，メキシコに産するわずかの種類を除けば，アメリカ合衆国の東部に1属1種を産するだけである。

日本には4属を産するが，近隣地域に産する数属を加えた検索表を以下に示す。

1. ——触角は第4節より鋸歯状となる。前胸背板の側縁に明瞭な段刻がある ……29. *Coraebus* Castelnau & Gory, 1839
——触角は第5または第6節より鋸歯状となる。前胸背板の側縁に段刻がない ……2.
2. ——前胸側板の外縁に触角溝がある ……30. *Nalanda* Théry, 1904
——前胸側板の外縁に触角溝がない……3.
3. ——両複眼の内縁は平行する……4.
——両複眼の内縁は下方に向け収斂し，頭頂に向け拡がる ……5.
4. ——腿節は短大，内側に細かい小歯列がある ……31. *Sambus* H. Deyrolle, 1864
——腿節は内側小歯列を欠く ……32. *Meliboeus* H. Deyrolle, 1864
5. ——脛節は拡大し扁平，跗節を収める……26. *Cryptodactylus* H. Deyrolle, 1864
——脛節は全く拡大することなく，跗節も収め得ない ……6.
6. ——脛節は弯曲し，曲げた場合には腿節との間に空間がある ……27. *Toxoscelus* H. Deyrolle, 1864
——脛節は全く弯曲することなく，腿節との間に空間を残さない ……28. *Metasambus* Kerremans, 1903

26. Genus **Cryptodactylus** H. Deyrolle, 1864 オオエグリタマムシ属

東洋熱帯とアフリカに分布し，約30種を含むが，この属で記載された種類の中には次属に含まれるべき種類も含まれているので，この種数は再検討を要する。日本には1種も産しないが，中国からインドシナにかけて数種を産する。

27. Genus **Toxoscelus** H. Deyrolle, 1864 サヤタマムシ属

インド，インドシナ半島，スマトラ，ボルネオ，ジャバ，フィリピンなどの東洋熱帯から日本，中国にかけて20余種を産するが，前属と同様にセレベスと小スンダ列島以東には1種も産しない。日本には3種を産するが，琉球列島の調査が進めば更に種類が増加するかも知れない。

1. *T. auriceps* (E. Saunders, 1873) クリタマムシ 分布：日本（北海道，本州，四国，九州，対馬），琉球（奄美大島）。*Cryptodactylus* 属として記載され，久しくそのままになっていたので，*T. japonicus* Obenberger, 1934 の異名が生じた。また *Cry-*

ptodactylus gracilis Schönfeldt, 1888 や神戸から記録された *T. rugicollis* E. Saunders, 1874（フィリピン原産）は共に本種の異名や同定誤りである。クリの枝幹の樹皮下に食い入る害虫であるが，他にコナラ，カシワ，ナラガシワなどにも加害する。

奄美大島産は本土産のものより前胸背の皺が強く別亜種 *amamianus* Y. Kurosawa, 1963 に属する。これはシイに加害する。

2. *T. yakushimensis* Y. Kurosawa, 1957 ヤクシマクリタマムシ　分布：日本（屋久島，奄美大島）。クリタマムシに似ているが，前胸背の皺が弱く，全体唐金色で，翅鞘に紫色の光沢がある。シイに加害する。最初屋久島安房で採集したものに基いて命名した。その後，前種の亜種と考えてそのように扱ったが，奄美大島には両種を産するので，別種とした方が妥当であろう。奄美大島産は別亜種に属する（未命名）。恐らく種子島にも産するであろう。

3. *T. sasakii* Y. Kurosawa, 1957 カラカネクリタマムシ　分布：日本（九州）。全体唐金色で，翅鞘に毛斑がない。鹿児島県霧島山栗野岳で採れた1♂に基いて記載したが，その後採集された個体は極めて少ない。

28. Genus **Metasambus** Kerremans, 1903, ヒメムナビロタマムシ属

模式種 *M. weyersi* (Kerremans, 1900)（スマトラ産）が台湾に産することになっているが，疑わしい。中国の山東省から *M. hoscheki* (Obenberger, 1916) が記載されているが，日本には産しない。

29. Genus **Coraebus** Castelnau & Gory, 1839 ナカボソタマムシ属

約150種を含むが，中国西南部からインドシナ半島にかけて圧倒的に種類が多く，一部は朝鮮，日本へ，西はヨーロッパ中南部へ，南は大スンダ諸島からフィリピンへと分布し，アフリカにも数種を産する。また一部はワーレス線を越えてセレベス，モルッカ諸島，ニューギニアにも及んでいるがその数は少ない。ニューギニア，オーストラリアなどでは近似の属 *Cisseis* Cas telnau & Gory, 1839 と *Cisseoides* Kerremans, 1893 に置き替えられる。なお，本属は幾つかの属や亜属に分割しなければならぬかも知れない。

日本には10種を産するが，他に2種名未定種がある。朝鮮には2種，台湾に15種，中国からは実に45種の記録がある。

1. *C. hastanus* Castelnau & Gory, 1839 ミドリナカボソタマムシ　分布：琉球，台湾，中国，インドシナ，ビルマ，ヒマラヤ，フィリピン，モルッカ諸島。原亜種はヒマラヤからインドシナ半島にかけて分布，台湾産は亜種 *ephippiatus* Théry, 1938 に属し，青味が強く短太，翅端の刳れが弱い。琉球産は亜種 *oberthuri* Lewis, 1896 に属し，緑色が強く細長，翅端の刳れは強い。アカメガシワ，アカギにつく。

2. *C. montanus* Miwa & Chûjô, 1940 ミヤマナカボソタマムシ　分布：日本（本州，四国，九州）。翅端は刳られ，会合部に長く鋭い棘があるので他種から一見して区別出来る。中部地方以西の地方に産し，関東以北に記録がない。サワフタギにつく。

3. *C. niponicus* Lewis, 1894 ルリナカボソタマムシ　分布：日本（九州南端，屋久島，種子島），琉球（奄美大島）。ルリ色の美しい種類でホウロクイチゴにつくが，リュウキュウイチゴにもつく。5,6月頃に多いが，7月頃に生残ったものには体色が紫紺のものが多い。奄美大島には多いが，沖縄本島からはまだ記録がない。

4. *C. grafi* Obenberger, 1934 ホソナカボソタマムシ　分布：日本（本州），中国，ヴェトナム，ラオス。日本産は独立種 *sakagutii* Y. Kurosawa, 1963 として記載したが，上記 *grafi* Obenberger, 1934 の亜種とした方がよい。大陸産に較べ，日本産は翅端の刳れが弱い。日本国内の分布は，東京都高尾山，山梨県三ッ峠，長野県上田市周辺など本州中部に限られている。5,6月頃キイチゴ類に見出されると云う。

5. *C. quadriundulatus* Motschulsky, 1866 シロオビナカボソタマムシ　分布：日本（北海道，本州，四国，九州），中国，ヒマラヤ。4月から7月にかけて各地に普通で各種のキイチゴ類の葉上に見出される。本種にも青紫色を帯びるものがあり var. *staudingeri* Obenberger, 1914 と命名されているが，これもルリナカボソタマムシと同様に7月頃に見られ，生き残りの個体である可能性が強い。

6. *C. ishiharai* Y. Kurosawa, 1943 サビナカボソタマムシ　分布：日本（本州，九州）。雄の後脛節端の内側に鉤状の突起がある点で，他の同属の種類と異る。東京都高尾山，鳥取県大山，福岡県福智山の3ヶ所以外の産地を知らない。ケヤキにいると云う。

7. *C. rusticanus* Lewis, 1892 ルイスナカボソタマムシ　分布：日本（北海道，本州，伊豆大島，神津島，八丈島，四国，九州）。主として山地のヤマハンノキやミヤマハンノキにつく。伊豆諸島産は♀が銅色を帯びる傾向があり，特に八丈島産は著しく，亜種 *fujiyamai* Y. Kurosawa, 1953 として区別する。伊豆諸島ではオオバヤシャブシにつく。*C. kamikochianus* Kano, 1929 カミコウチナカボソタマムシは異名である。

8. *C. ignotus* E. Saunders, 1873 カラカネナカボソタマムシ　分布：日本（本州，九州，屋久島，種子島），琉球（奄美大島），台湾。本州では稀であるが，九州では平地のシイに6,7月頃稀でない。四国にも当然産すると思うが，まだ記録がない。原産地は恐らく長崎であろう。屋久島と種子島産は翅鞘の地色が鋼鉄色を呈する亜種 *matsudai* Y. Kurosawa, 1953 に，奄美大島産は更に暗色の亜種 *shibatai* Y. Kurosawa, 1963 に属する。台湾産は九州産のものによく似ている。

9. *C. kiangsuanus* Obenberger, 1934 シリグロナカボソタマムシ　分布：日本（本州），朝鮮，満

洲，中国。中国の江蘇省から記載された種類であるが，満洲（関東州）や朝鮮（京畿道光陵）にも産する。日本産は亜種 *nigromaculatus* Y. Kurosawa, 1953 に属し，内側隆線の形が異る。極めて稀種で，和歌山県護摩壇山，新潟県黒川，山梨県（1♀，東山梨郡三富村西沢，x. 1967，養老孟司採集——新記録）で各1頭の記録があるだけである。加害植物は未知であるが，恐らくブナ科植物ではないかと推定される。

10. *C. loochooensis* Kano, 1929 オキナワナカボソタマムシ 分布：琉球（沖縄本島）。青藍色の美麗種。沖縄本島特産で現在までに採集された数は私の知る限り，模式標本を含めてただ2頭[1]だけである。

30. Genus **Nalanda** Théry, 1904 チビナカボソタマムシ属

この属は次の属 *Meliboeus* H. Deyrolle, 1864 と久しく混同され，故 J. Obenberger は死ぬまでその独立属であることを認めなかった。しかし，触角溝の存否，触角の鋸歯状節の数，複眼の構造などの相異は両者を区別するに充分な特徴と考えられる。その分布は東はニューギニア，フィリピン，台湾，日本から中国，インドを経て西はアフリカや地中海地方に及んでいるが，その中心はインドシナ半島，スンダランド（マレー，スマトラ，ボルネオなど）などで，多くの種類がある。旧く *Meliboeus* 属で記載された種類のうち，東洋熱帯からのものはほとんど全部本属 *Nalanda* に属すると考えられるが，アフリカのものはどちらかはっきりしない。中国のものも大部分は *Nalanda* と考えて差支えない。ヨーロッパから中央アジアにかけては大部分が真の *Meliboeus* で *Nalanda* は少なく，ヨーロッパには唯一種だけである。これは，*Nalanda* は森林性で枯枝に食い入るのに反し，*Meliboeus* は草原性で，乾燥地の草の茎や根茎に食い入るためである。

H. Deyrolle は 1864年に新属 *Meliboeus* を記載した際に，記載は *M. nigrocaeruleus* n. sp. など東洋区産の種類を基にし，触角溝を有すると明記しながら，模式種として *Coraebus aeneicollis* Villers, 1789 (=*fulgidicollis* Lucas, 1846), *C. episcopalis* Mannerheim, 1837 および *C. robustus* Küster, 1852 の3種を選んだので以後著しい混乱を惹き起すことになった。因みに，上記3種共にヨーロッパ産で，*aeneicollis* だけは触角溝があるが，他の2種には全く触角溝がない。この不合理な模式種の選定のために，その後ヨーロッパの種類は全部 *Meliboeus* 属にされてしまい，これを見馴れたヨーロッパ人には東洋の真の *Meliboeus* とすべきものが，別属のように映り，1904年に A. Théry はセイロンの真の *Meliboeus* に属すべき種類を，触角溝があると云う理由だけで，新属新種 *Nalanda horni* として記載した。1913年，Witzman の "Genera Insectorum" で Ch. Kerremans はナガタマムシ亜科を触角溝の有無で2分し，*Meliboeus* H. Deyrolle, 1864 を触角溝の無い方に入れたが，*Nalanda* Théry, 1904 を見落してしまった。一方アメリカの W. Fisher はこの Kerremans の検索表だけに頼り，東洋の *Meliboeus* に触角溝を持ったものが多いことを知らずに，触角溝を持つことだけを特徴にフィリピンから新属新種 *Neosambus cupricollis* を記載した。このように，*Meliboeus* H. Deyrolle, 1864 は本来は東洋熱帯に産する森林性の一群に用うべき属名であるが，模式種の選定を誤ったために，混乱を惹き起し，A. Théry が本来模式種となるべき *M. aeneicollis* Villers, 1789 を彼が記載した *Nalanda* 属に移し，Deyrolle が模式種に選んだ3種のうち第2の種類 *episcopalis* Mannerheim, 1837 を *Meliboeus* の模式種に指定したため，Deyrolle が *Meliboeus* を記載した時にこの属として記載した5種が全部 *Meliboeus* ではなく *Nalanda* Théry, 1904 に移さなければならないと云う奇妙なことになってしまった。

台湾に6種，中国に約15種を産する。日本は分布の北限に当り，次の3種を産する。

1. *N. shirozui* Y. Kurosawa, 1954 クロチビナカボソタマムシ 分布：日本(対馬)。対馬には6月頃比較的普通に産する。アベマキ，コナラなどにつく。なお，本種の種名は変更する必要があるかも知れない。

2. *N. ohbayashii* Y. Kurosawa, 1957 カラカネチビナカボソタマムシ 分布：日本（本州，九州）。稀な種類でオニグルミから採れる。

3. *N. rutilicollis* (Obenberger, 1914) ムネアカチビナカボソタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，屋久島），琉球（奄美大島，沖縄本島，石垣島，西表島），台湾，中国。6～8月にアカメガシワの葉上に見られる。東京以北の標本は見たことがない。奄美大島以西の琉球列島と台湾のものは翅鞘が明るく，前胸背の皺の形が多少異り，別亜種 *formosana* Obenberger, 1944 に属する。しかし，琉球列島のものは各群島ごとに多少の地理的変異があり，亜種を分けなければならないかも知れない。

31. Genus **Sambus** H. Deyrolle, 1864 ムナビロタマムシ属

東洋熱帯，特にビルマからインドシナ半島，マレー，スマトラ，ボルネオにかけての地域に分布の中心があるが，北は中国，日本に，東はニューギニアから，ニューカレドニア，フィジー諸島などの西太平洋諸島，西はアフリカ中南部に約130種を産する。日本領には次の2種を産する。

1. *S. quadricolor* E. Saunders, 1873 アヤムナビロタマムシ 分布：日本（九州，屋久島），琉球（奄美大島，沖縄，八重山），台湾。特異な斑紋で一

註1. 模式標本には種名を示すラベルが一枚あるだけで，産地，日付を示すラベルは全く付いてない。他の1頭は，1♀，沖縄本島伊豆味，4, vii. 1962, T. Kobayashi 採集。

見して区別出来る。原産地は恐らく長崎であろう。九州には比較的多く，オオイタビ，イタビカツラ，イチジクなどにつくが，私はまだ，本州や四国産の確実な標本を見たことがない。琉球列島や台湾のものは前胸背が黒化する傾向がある。

2. *S. aeneicollis* Fisher, 1921 ヤエヤマムナビロタマムシ（新称） 分布：琉球（八重山），フィリピン。フィリピンから記載された種類で，琉球からは新記録である。[2)]

なお本属の種類は台湾から5種，中国から6種類記載されている。

32. Genus **Meliboeus** H. Deyrolle, 1864 ムナコブナカボソタマムシ属

Nalanda 属の項で述べた通り，本来東洋産の種類に用うべきこの属名が，模式種の選定を誤ったために，ヨーロッパやアフリカの種類に当てなければならなくなってしまった。

乾燥地に多い属で，地中海地方，中央アジア，近東，アフリカなどに多くの種類がある。東亜には種類数僅少で，中国に数種を産するに過ぎない。熱帯アジアから本属で記載された種類の大部分は前記の *Nalanda* 属に移さなければならない。

幼虫は乾燥地に生ずるキク科やシソ科などの植物の茎に食い入り，根茎部に侵入して越冬し蛹化する。この点でカミキリムシ科の *Phytoecia* 属（キクスイカミキリ属）によく似ている。（国立科学博物館）

2) 2♂♂ 1♀，石垣島武田，3～6. v. 1963，有田豊 採集。

○アオオサムシの朽木越冬

—越後のオサムシ覚え書 (3)—

1967年11月1日，鶴巻は新潟県南魚沼郡湯沢町中里において，高さ40cm程の腐朽した杉の切株の上部に越冬中のアオオサ1頭を採集した。本種は通常土中で越冬し，このような朽木越冬の例は珍しいと思われるので記録して備忘としたい。

なお，黒沢良彦博士の御教示によれば，本種の朽木越冬は関東ではときたま見るが，東北方面では稀であるという。（新潟県新発田市 **小池 寛・鶴巻洋志**）

○ナカネナガタマムシ成虫の生態について

東京都新宿区戸山町付近は，昔戸山ヶ原といい昆虫の多い処として著名であった。現在もその名残りがみられるが，昆虫の数は急速に減少の一途をたどっている。

現在，タマムシ科甲虫はナカネナガタマムシ *Agrilus acastus nakanei* Y. Kurosawa の他，タマムシ，ムネアカチビナカボソタマムシ，クワナガタマムシの3種の生息を確認している。

ナカネナガタマムシの出現期は長く，4月下旬に早くもその姿が見られ，7月下旬まで観察でき，最盛期は6月である。午前9時頃から4時頃まで陽光を浴びながら各種植物の葉から葉へと飛びまわるが，その動作は素早い。訪れる植物は主に樹木であり，アカメガシワ，ミズキ，エノキ，ニワトコ，イチジク，クワ，クルミ類，ポポ等と極めて広範囲にわたる。その点タマムシ，ムネアカチビナカボソタマムシ，クワナガタマムシがそれぞれエノキ，アカメガシワ，クワを好み，その木に特によく訪れるのとはかなり習性を異にしている。

ナカネナガタマムシ成虫はポポの葉を食べ，葉脈を残して葉肉の部分を円形もしくは楕円形に食害する。ポポ以外の樹木も後食している可能性は強いが，まだ観察していない。

末筆ながら，タマムシ類を同定して下さった国立科学博物館黒沢良彦博士，および樹木を同定して下きった同館奥山春季氏に厚く御礼申し上げる。

（東京都新宿区 **辻 啓介**）

○燈火に来たアオタマムシ

アオタマムシ *Eurythyrea tenuistriata* Lewis は比較的少ない種で燈火に来たという記録はなかった様であるが，私は今年の7月23日，東京都八王子市高尾山ケーブルカー高尾山駅で，夜間採集を行った際，駅舎付近の便所の電燈に来ていた（入口の所のコンクリートの地面に止まっていた）本種1♂を採集した。その後26日夜間採集に訪れ，また1頭採集できたが先客の話によると前日の25日には3人で10頭近く採集できたそうだ。この種は足の力が弱いのかカミキリムシやクワガタムシの様にかべや白幕に止まることができず，皆地面に止まっているものばかりなので，納涼ビアガーデンの客などに踏みつぶされて無残な姿になっているものが半分近くあった。それから私の知っている8月5日までの間は1晩に1頭出るか出ないかぐらいだったが，地面をよく見廻ればもっと得られそうである。なお6月28日にはコガネナガタマムシ *Agrilus fortunatus* Lewis も白幕に飛来した。その他，6月28日と7月21日～8月5日の間10日間の夜間採集で，キイロミヤマ，ヨコヤマヒゲナガ，マツノトビイロ，ツシマムナクボ，セミスジ，ニセリンゴ，ホソモモブト，イボタサビ，ナカバヤシモモブト，アメイロ，カッコウメダカ，タイワンメダカなど約50種ぐらいのカミキリムシを記録し，フジミドリシジミやコカブトムシ，ムツモンミツギリゾウムシなども採集できたが，高尾山が国定公園に指定され，昆虫採集禁止が唱えられているので，この高尾山ケーブルカー駅では8月9日以降特別な許可でも得ないかぎり電気を使わしてもらえないようである。末筆ながら同定，その他御教示をいただいた黒沢良彦博士に深く感謝申し上げます。（東京都台東区，**藤田 宏**）

○ツシマムツボシタマムシ広島県に産す

ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris tsushimae* Obenberger を広島県と山口県の県境に位置する冠山（標高1339m）の高原部から採集した。本種は従来まで，朝鮮と対馬以外，日本本土からは

全く記録のないものであるが，今回，冠山における2回の採集でアベマキの粗朶から6紋型のもの4頭と4紋型のもの6頭の計10頭を得ることができた。黒沢博士は対馬産の4紋型の1♀を所有されているが，冠山からも4紋型のものが，高頻度で採集されたことは興味深く，本種のもつ遺伝的特徴の一つかも知れない。採集年月日は次のようである。6紋型1頭（28. vi. 1970），6紋型3頭，4紋型6頭，(30. VI. 1970)。

いろいろと親切に御教示下さった黒沢良彦博士に厚くお礼申し上げる。　（広島県呉市，小阪敏和）

○分布資料：ツマグロツツカッコウムシ

本種 *Tenerus hilleri* Harold は，暖地性の種であるらしく，東北方面における採集例を知らないがこの地方では稀なものと思われる。筆者の手許には昆虫類の宝庫として著名な飯豊山ヌクミ平産（1967年7月25日）の1頭があるので，分布資料として記録に止め，備忘としたい。

（新潟県新発田市　小池　寛）

○シラオビシデムシモドキ佐渡に産す

本種 *Nodynus leucofasciatus* Lewis は，さして珍しい種ではないが従来佐渡島からの記録はない。稍以前のことになるが1963年6月1日に筆者は，相川町大倉沢の山林で樹液に来集した本種多数を採集しているので，佐渡未記録として記録しておきたい。ついでに新潟県本土における採集品としては下記の標本を所蔵しているので併せて報告する。

3頭，新発田市上石川，1954年5月11日。

（新潟県新発田市　小池　寛）

○沖縄本島でオガサワラチャイロカミキリを採集

1970年6月15日，沖縄本島与那で，オガサワラチャイロカミキリ *Comusia testacea* Gressitt 1♀を採集した。夜間木材に飛来したもので，同時にムネスジウスバカミキリ，オキナワトビイロカミキリ，スジダカサビカミキリ等が同じ材から得られた。本種は初め小笠原で記載され，近年奄美大島，屋久島等で採集されたが，沖縄本島からは初記録である。

（東京都港区　小宮次郎）

○オキナワムツボシタマムシの沖縄本島における採集記録とその加害植物

オキナワムツボシタマムシ *Chrysobothris saliaris* Y. Kurosawa は前胸背板が赤色で，邦産の同属中で最も美しい種である。黒沢博士の御教示によれば，本種は初め沖縄本島から記載されたが，その後は本島ではほとんど採れず，八重山諸島で記録されているのみであるとのことである。1970年6月15日，沖縄本島北部の与那付近で，本種1♂1♀を採集したので報告する。またその際，シイの枯枝を宿舎に持ち帰ったところ，これから1♀が羽化脱出したので，シイを本種の加害植物として，併せて報告する。件の枯枝はシイの立木から折れて下っていたもので，直径15mm位，皮が一部はげかかったかなり古そうなものであった。末筆ながら種々御教示下さった黒沢博士に感謝する。

（東京都港区　小宮次郎）

○キマダラカミキリの初見日

本誌No. 9に黒沢氏が世田谷区でキマダラカミキリを5月8日に採集されたことを報じておられる。例年に比べ本種の今年の発生は確かに早く，私も新宿区戸山町で5月13日に夜間燈火に飛来した雄1頭を採集しているので，追記しておきたい。

（新宿区　辻　啓介）

○オサムシ用トラップに入ったカミキリ

本紙4号に，オサムシ用トラップに入るカミキリについて，小宮次郎氏の報告があるが，私も次のような例を報告しておく。

1. セダカコブヤハズカミキリ
   1♀，徳島県剣山，20. v. 1969.
2. ヒメコブヤハズカミキリ
   1♀，淡路島先山，3. v. 1969.
3. フジコブヤハズカミキリ
   1♀，長野県八カ岳，15. viii. 1968.
4. コブヤハズカミキリ
   1♂，長野県妙高天狗原山，15. ix. 1969;
   1♀，山形県蔵王山，11. viii. 1969.

このほか，よく入るカミキリには，ヒメハナ，ノコギリ，オオヨツスジハナなどがある。

（大阪府豊中市　水沼哲郎）

○潤滑油に来集した甲虫

筆者が勤務している新宿区戸山町の国立栄養研究所で，真空ポンプに多数の小型甲虫が来集し，潤滑油の中で死亡していた。筆者が見つけた時は，既に死亡してかなり月日を経ている状態であり，これらの甲虫が潤滑油にどういう理由で集ったのかは知ることができなかった。発見したのは1969年7月18日である。

甲虫の種類は次の二種類に分類できた。

ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* Linné　38頭

ジンサンシバンムシ *Stegobium paniceum* Linné　6頭

これら2種のうち，ジンサンシバンムシは当研究所に極めて多く，ラット飼育用固型飼料，アルファスターチ，合成粉末飼料，小麦粉等を食害しているのを観察している。ノコギリヒラタムシは前種に比べ観察例は少ないがアルファスターチに多数増殖していたことがあった。主に製粉，製菓類，乾燥果実類の害虫として著名である。

両種とも炭水化物に富む食糧や食品の害虫であるだけに，潤滑油中に多数の死体を見つけ得たことは興味を引く事実である。単に歩行中の個体が偶然に油中に落ち込んだにしては多すぎる。明らかに相当数がこの油に誘引され集合したものと推定される。この真空ポンプは各種栄養実験に使用されるため，あるいは飼料用のでんぷんなどがポンプや油にふりかかり，その匂いに刺戟された甲虫が油に落ち込んだのかもしれない。またノコギリヒラタムシの近似種オオメノコギリヒラタムシ（*O. mercator*）は油脂原料を食害するので，2種の甲虫も潤滑油そのものに誘引されたのでないかとも考えられるが，いず

れも推定の段階にすぎない。

末筆ながら，ノコギリヒラタムシを快よく同定して下さった科学博物館中根猛彦博士に厚く御礼申し上げる　（東京都新宿区　辻　啓介）

○栃木県野木町でベニバハナカミキリを採集

今日の6月7日，栃木県下都賀郡野木町へヤマトチビコバネカミキリを採集に行った際，野木神社裏にある雑木林をビーティングして，ベニバハナカミキリを1頭得たので報告する。なお当日は他に，ヤマトチビコバネ，ヒシ，ニイジマチビ，ケシ，アトジロサビ，アトモンサビ，シナノクロフ，ルリなどのカミキリムシを採集している。

（東京都台東区　藤田　宏）

○ムネアカセンチコガネの飛翔

ムネアカセンチコガネ *Bolbocerosoma nigroplagiatum* Waterhouse は今でこそ東京の近郊からすっかり姿を消してしまったが，戦前には板橋，練馬，杉並，世田谷など周辺の区の多くは畠で，夕刻になると本種がよく室内に飛来した。本種は飛翔する時に一種独特な異様な羽音を発して飛び廻るので，薄暗い光の中でも，その羽音によって直ちに本種が飛来したことを知ることが出来たものである。その羽音は他のコガネムシ類が発するブーンと云う単調な連続音ではなく，ブンブンブンブンと云う小刻みな羽音で，地表を飛ぶマルハナバチ特有の羽音に酷似している。飛び方が或る種の蜂にそっくりなウスチャコガネ *Phyllopertha diversa* Waterhouse やオオトラフコガネ *Paratrichius doenitzi* Harold などでも飛ぶ時にやや蜂に似た羽音を発するが，本種のように高く特徴のある羽音は発しない。マルハナバチ類は活動時間が長く，薄暮になってもまだ活動していることが多く，羽音だけ聞えて来るが，虫体は見つけ難いことがよくある。この点で本種はマルハナバチに擬態（音!）しているのではないかと考えられるが如何であろうか。もしこれが成り立てば擬態は色や形ばかりではなく，音にもあることになる。　（東京都世田谷区　黒沢良彦）

○紹介

Coleoptera of the Loo-choo Archipelago (II), Mem. Fac. Educ, Kagawa Univ. 2 (192) 63pp. (1970)

中条道夫博士編集による奄美大島以南の琉球列島産の甲虫類の報告である。主して中条博士の労作であるが，土生昶申（ゴミムシ科），佐藤正孝（ヒラタドロムシ科，ガムシ科，ナガハナノミ科，ダエンマルトゲムシ科，ベニボタル科，ホタル科），W. Wittmer（ジョウカイボン科，ジョウカイモドキ科），大林延夫（カツオブシムシ科），久松定成（ケシキスイ科），宮武睦夫（テントウムシ科），中条道崇（ゴミムシダマシ科，）A. Villiers（カミキリムシ科の一部），および S. von Breuning（カミキリムシ科のうちフトカミキリ亜科）など諸氏がそれぞれ専門の分野で協力しておられる。この中で新名が与えられたものは次の通りである。*Therates alboobliquatus iriomotensis* Chûjô（西表島）（ハンミョウ科），*Cercyon yayeyama* Chûjô & Satô（西表島）（ガムシ科），*Eubrianax ihai* Chûjô & Satô（石垣島）（ヒラタドロムシ科），*Anthaxia moya* Chûjô（八重山），*A. ihanatumi* Chûjô（沖縄本島）（タマムシ科），*Pseudoabsidia ryukyuana* Wittmer（西表島），*Malthinus okinawanus* Wittmer（沖縄本島）（ジョウカイボン科），*Sternodeattus chujoi* Wittmer（石垣島，新属）（ジョウカイモドキ科），*Plateros ignius* Chûjô & Satô（西表島），*P. rufomarginatus* Chûjo & Satô（西表島），*P. yayeyamanus* Chûjô & Satô（竹富島）（ベニボタル科），*Anadastus rufobrunneus* Chûjô（西表島），*Tetralanguria okinawana* Chûjô（沖縄本島）（コメツキモドキ科），*Iriomoteus elegans* Villiers & Chûjô（西表島，新属），*Sybra* (*S.*) *mimogeminata carinatipennis* Breuning & Chûjô（竹富島），*S.* (*S.*) *musashinoi* Breuning & Chûjô（尖閣列島）（カミキリムシ科）。タマムシ科の2種はそれぞれ私が8号に触れておいたヤエヤマヒメヒラタタマムシ（八重山諸島）とオキナワヒメヒラタタマムシ（沖縄本島）に当る。　（国立科学博物館　黒沢良彦）

マレー半島産甲虫類入荷

マレー半島産甲虫類（コガネムシ，クワガタムシ，カミキリムシ，ゾウムシ，其他）が多数入荷しています。御希望の方は返信料御封入のうえ価格表を御請求下さい。

東京都練馬区石神井局私書箱2号
大蔵生物研究所

甲虫談話会

会費（1カ年）500円，第12号は12月末発行予定
投稿〆切は11月30日。
発行人　黒沢良彦
発行所　甲虫談話会　東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電(822)0111，振替東京60,664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱　木製大　¥ 2,600
〃中　¥ 2,000
新ドイツ型標本箱プラスチック製大¥ 1,700
送料　一箱につき　都内及び第一地帯：¥ 425，第2地帯 ¥ 475，第3地帯 ¥ 550
其他，各種器具，針などを製作販売しております。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所
〒113　東京都文京区湯島 2-21-25
電話　(03) 811—4547